

小説『耳をふさぐ夜に、言葉を探して』

(理不尽さのなかで立ち止まった看護師の物語)

第0章 プロローグ － 言葉の届かない場所で －

夜勤明けのバスの揺れが、体の芯に疲れを残す。

座席にもたれながら、森山奈津美はぼんやりと窓の外を見つめていた。

師長が代わってから、何かが変わった気がしている。

語気、言葉の端々、些細な表情——それらが胸に刺さるようになったのは、いつからだったか。

看護師という仕事に、誇りはある。人と関わることの意味も、失ったわけじゃない。

けれど、ここ最近は、出勤のたびに小さく身構える自分がいる。

「このままでいいのかな」

そんな問い合わせが、ふと浮かんでは消える。

答えの出ないまま、彼女はいつかキャリア相談室の扉をノックすることになる——。

・ 森山 奈津美(もりやま なつみ)／38歳・看護師(15年目)

中学生の頃から看護師を目指し、医療専門学校を卒業後、現在の病院に就職。真面目で責任感が強く、患者からの信頼も厚い。2年前に上司(師長)が代わって以降、職場での理不尽な対応が続き、疲弊。転職も考えつつ、今の職場への愛着もあり、悩んでいる。

・ 西園 智久(にしその ともひさ)／62歳・キャリアコンサルタント

地域のキャリア相談機関に所属するキャリアコンサルタント。元メーカー人事部出身で、静かな傾聴と穏やかな助言に定評がある。

第1章 夜明け前の引っかかり

夜勤明けの病棟は、どこか独特な静けさに包まれている。

ナースステーションの蛍光灯がまぶしくて、森山奈津美は目を細めながら、記録用紙に最後の走り書きをしていた。

「おつかれさま。あとはこっちで引き継ぐから」

交代で来た日勤の看護師が、軽く声をかけてくれる。

いつもなら「ありがとう」と笑顔を返せるはずだった。でも今日は、その一言すら、喉の奥で引っかかるって出てこなかった。

病院を出ると、朝の光が街を照らしていた。

夜勤を終えた者だけが感じる、この少し不自然な明るさが、彼女の心に違和感を際立たせる。

通勤客の流れを避けながら、駅とは逆方向のカフェに足を向けた。

氷が解けかけたアイスコーヒーを前に、奈津美は昨晩のことを思い返す。

深夜 2 時すぎ。認知症の患者がトイレで転倒しかけた。幸いケガはなかったが、ヒヤリ・ハットとして記録に残るインシデントとなった。

翌朝の申し送りの場で、師長の言葉が飛んできた。

「見てたの？ ああいう場面は事前に確認しておくべきでしょう？」

一瞬、時間が止まった気がした。

「えっ」と、反射的に声が漏れたかもしれない。

あの場にいた他のスタッフもいた。自分ひとりが責められるのは、理不尽だった。

それでも、反論する気力は湧いてこなかった。

「私のせい？」

自己に何度も問い合わせてみた。確かに、もっと注意深く動けたかもしれない。でも、チームで動いているのに、その結果だけを一人の責任にされるのは、違う。

「なんか、疲れたな……」

コーヒーはもうぬるく、苦味だけが口の中に残っていた。

奈津美は看護師になって 15 年になる。

医療専門学校を卒業してすぐにこの病院に入り、ここまでやってきた。

忙しくても、きつても、「患者さんの笑顔が力になる」と信じて踏ん張ってきた。

けれど最近、その原動力がどこかに置き去りにされてしまったような感覚がある。

2 年前に師長が代わった。

それが、すべての始まりだった——。

それまでとは違う空気が病棟に流れ始めた。細かな点にも鋭い指摘が入るようになり、奈

津美は少しづつ、自分だけに強い圧がかかっているように感じるようになった。

自分だけでなく、同僚たちも同じような対応を受けていた。

けれど皆、口をつぐむ。

「気にしない方がいいよ」

そんなふうに言い合って、やり過ごすしかなかった。

奈津美も同じだった。

“気にしない”ふりを続けてきた。

でも、心のどこかにずっと「引っかかり」は残っていた。

コップの水が、いつの間にかあふれていたのかもしれない。

それが、昨日だったのか、今日なのかは分からない。

けれど今、確かに自分のなかで「何かが違う」と感じている。

だから今日、初めてキャリア相談の予約を取った。

「病院を辞めたいわけじゃない。でも……このままじゃ、続けられないかもしれない」

その揺れを、誰かに話してみたくなった。

第2章 あの人気がいた頃

2年前の春、師長が交代した。

理由は人事異動。本人の希望ではなく、病院全体の配置換えだったと聞いた。

それでも奈津美にとっては、大きな転機だった。

以前の師長——佐原さんは、いつも忙しそうだったが、話を聞くときはきちんと目を合わせてくれた。

「森山さん、それってどうしてそう思ったの？」

「無理してない？ ちょっと休んでいいよ」

決して甘やかすわけではない。

けれど、一人ひとりを“見よう”してくれている感覚があった。

「患者さんと接するときは、相手の立場になって考えるのが第一よ」

それが口癖だった。

あの言葉は、奈津美の中で“看護師である自分”的土台になっていた。

新しい師長——桐谷さんが就任した当初は、それほど違和感はなかった。
事務的で口数は少ないけれど、的確に指示を出す。現場での経験も豊富な人だった。

だが、少しづつ、空気が変わっていった。

申し送りの場で、些細なミスを名指しで指摘されるようになった。

病棟全体に緊張感が走る。

「前は、こんな雰囲気じゃなかったのに」

奈津美は、同僚たちとそんな話を交わすようになった。

けれど、誰も本音を言おうとはしなかった。

お互いの愚痴をこぼし合うだけで、誰かが声を上げることはなかった。

「師長って、誰にでもああなんだよね」

「気にしない方がいいよ。言い返しても無駄だし」

そう言って肩をすくめる後輩の顔を見ながら、奈津美も笑って見せた。

でも、内心ではその言葉に違和感があった。

“気にしない方がいい”というのは、無力感の裏返しだ。

本当は、みんな、言われたくない。

責任を押し付けられたくない。

ただ、何も言えないから、笑ってごまかしているだけ——。

夜勤中のインシデントがあったあの日、師長の言葉は、奈津美にとって一線を越えたものだった。

「見てたの？ 確認すべきだったでしょう？」

声の調子も、言葉の選び方も、まるで責めるようだった。

まるで“お前のせいだ”と、言っているかのように。

それが、苦しかった。

チームで働くはずの職場で、ひとりだけを突き放される感覚。

その場にいたスタッフは他にもいた。なのに、奈津美だけが名指しされた。

「なんで私にだけ…？」

言葉にはできなかった疑問が、胸の奥に沈殿していく。

帰り道、いつものようにコンビニに寄ったが、何も買う気になれなかつた。

家に帰ってもテレビをつける気にもなれず、スマートフォンを無造作にいじっていたとき、あるページが目に入った。

— キャリア相談窓口「働くあなたの悩みに寄り添います」—

「看護師でも、いいのかな……」

そう思いながら、半ば衝動的に予約フォームを送信した。

いま自分が何を望んでいるのか、まだはつきりとは分からぬ。

ただひとつ確かなのは、「このままじゃいけない」ということだった。

第3章 踏み出す前に立ち止まる

カフェのテラス席で、奈津美はスマートフォンの画面を何度も確認していた。

「キャリア相談予約完了」という表示を見ても、まだどこか現実味がなかつた。

「こんなところに相談して、何か変わるんだろうか」

そう思う自分と、

「今のままじゃ持たない」

と訴える自分が、心の中でせめぎ合っている。

勤務表では、次の夜勤まで少し間が空いていた。

相談予約の日まで、あと二日。

そのあいだ、何ができるわけでもなかつたけれど、自分の気持ちを整理したくて、ノートを開いた。

普段はほとんど使っていない手帳のメモ欄に、思いつくまま、言葉を書き連ねていく。

「責められてばかりで、何が正しいか分からなくなる」

「みんなも辛いはずなのに、どうして誰も何も言えないの？」

「転職したい。でも、ここで出会った人たちのことは好き」

「師長以外は、いい職場だと思ってる」

書けば書くほど、答えは遠のいていくようだった。

それでも、「言葉にする」ことで、何かが整理されていく感覚はあった。

思えば、これまで誰かに自分の気持ちを話したことは、あまりなかった。

患者のことは話せても、自分のことは後回しにしてきた。

愚痴になってしまるのが嫌だったし、何より、「弱音を吐いたら負けだ」と思い込んでいた。

でも今は、違う。

疲れている。

怒っている。

戸惑っている。

寂しい。

傷ついている——。

そんな自分の感情を、ようやく認められるようになってきた。

翌日、夜勤明けの同僚・千夏と駅前のパン屋で昼食をとった。

ほんの少し、相談に行くつもりだと話してみた。

「えっ、キャリア相談？ 珍しいね、奈津美がそういうの行くなんて」

千夏が、あっけにとられたように目を丸くする。

「まあね……でも、ちょっと話を聞いてもらいたいなって思って」

「転職、考えてるってこと？」

「んー……わかんない。辞めたいっていうより、今のままじゃつぶれそうって感じ」

千夏はコーヒーを一口すすってから、静かに言った。

「わたしも最近、ちょっと限界感じてたんだよね」

「……そうなの？」

「うん。でも、誰かに相談するって発想なかったな。偉いよ、奈津美」

「偉い」なんて言葉には慣れていないから、照れくさくなって話題を変えた。

けれど、千夏の一言は、どこか背中を押してくれるような力があった。

次の日、天気はあいにくの雨だった。

相談窓口のあるビルの入口に立ったとき、傘の先から水がぽたぽたと落ちていた。

受付の女性に案内され、小さな相談室に通される。

白い壁、観葉植物、木製の椅子と机。

病院とはまるで違う、静かな空間。

ノックの音とともに、やや年配の男性が入ってきた。

「こんにちは。キャリアコンサルタントの西園です。今日はどうぞよろしくお願ひします」

ゆっくりと、穏やかな口調。

西園と名乗ったその人は、柔らかく微笑んで席についた。

その瞬間、奈津美は、不思議なことに「何か話せそうな気がする」と思った。

第4章 誰かに話すということ

「森山奈津美と申します。よろしくお願ひします」

椅子に腰を下ろすと、西園は軽く頷いた。

「今日は、何かご相談ごとがあると思うのですが、どういったことでしょうか？」

奈津美は、一度呼吸を整えてから、ゆっくりと言葉を紡ぎ始めた。

「看護師として、15年ほど働いているんですけど……最近、色々なことを任されるようになって、理不尽だなって感じることが増えてきて……。今の職場、このまま続けるのは無理かもって思い始めていて……」

自分の声が少し震えていることに気づいた。

でも、西園はそのまま受け止めてくれた。

「そうですか。最近、理不尽なことがあると感じていらっしゃるんですね。もう少し詳しく聞かせていただけますか？ どんなことがあったのでしょうか？」

奈津美は、言葉を選びながら話し始めた。

「師長が変わったんです、2年前に。それから少しづつ……私の責任だって言われることが増えて。最近では、夜勤中にあったインシデントのことでも、“ちゃんと見てたの？”って。私

のせい、って言われたように感じて……」

「その言葉を聞いて、どんなお気持ちでしたか？」

「……“えっ”って思いました。なんで私にそんなこと言うの、って。私だけの責任じゃないのに……」

西園は少し頷いた。

「その師長さん、他の職員の方にも同じような言い方をされる方ですか？」

「はい……皆も、“あの人はそうだから”って。だから、気にしないようになってたんですけど、ずっとそれが続いて……最近は、仕事に行くのが辛いなって」

「そうですか。お辛いですね……以前の師長さんは、どんな方だったんですか？」

「ちゃんと話を聞いてくれる人でした。今の師長とは全然違って……。今は、何を言っても通じない気がして」

「なるほど……。今の奈津美さんの立場としては、中堅の位置でしょうか？」

「そうですね。上の人も多いんですけど、若い子たちに指導する立場もあると思います。たぶん、上からは、もっと上のレベルを求められてる気がします」

「職場としては、転職もしやすいとは思いますが、今のお話を伺うと、転職に対しても迷いがあるように感じました。どうでしょう？」

奈津美は、しばらく沈黙したあと、小さくうなずいた。

「職場自体は好きなんです。人間関係もいいし、できれば続けたい……でも、居るのが辛くて。だから、どうしたらいいか分からなくなって、今日来ました」

「なるほど。周囲の人とはいい関係が築けている。けれども、上司の対応がきつくて、そのことで心が削られている……。それがこの悩みの中心にあるということですね」

「はい……。他の人と話しても、結局は“師長ってそういう人だよね”って愚痴になるだけで……建設的なことは何も出てこなくて……」

「外で集まって話す機会などはあるんですか？」

「交替勤務なので、タイミングが合えば。でも、師長の話をするのが嫌で……。文句を言つてるだけみたいになるのが、なんか違うなって思つて……」

西園は、ゆっくりと腕を組み直しながら、静かに口を開いた。

「師長さんとの定期的な面談はありますか？」

「年に2回くらいです。でも、形式的というか……“あなたはこうだったけどどう？”っていう感じで、あまり対話にはなりません」

「そうですか。その中で、今回が特に辛かったというのは、自分の責任でないことまで、そう言われたと感じたからですか？」

「……はい。たしかに事実はそうかもしれません。でも、なぜそうなったのか、その背景や今後の改善策に触れず、ただ“どうしてそうしたの？”と詰め寄られるような……。そういう言い方が辛くて」

「理由を問うばかりで、“これからどうしたらいいか”という視点がないと感じられたんですね」

「はい。もしそこに、未来を見据えた言葉があったら、私、こんなに落ち込まなかつたと思うんです」

しばらく、沈黙があった。

けれどその沈黙は、心地よいものだった。

誰にも話せなかつたことを、ようやく誰かに届けることができた——そんな安心感が、奈津美の胸に広がっていた。

第5章 言葉にならない声

「今日は、よく話してくださいましたね」

面談の終わり際、西園がそう言ったとき、奈津美はなんとも言えない気持ちになった。
「話す」という行為が、こんなにも心を軽くするとは思つていなかつた。

キャリア相談室を出たのは、午後の遅い時間。

雨はすっかり上がりついて、アスファルトに残る水たまりだけが、さっきまでの天気を物語っていた。

ビルの前で深呼吸をすると、思ったより胸がすっとしている。

出口が見えたわけじゃない。

でも、ひとりで悩んでいた時よりも、世界が少しだけ優しくなった気がした。

帰り道、ふと思い出したのは、まだ新人だった頃のことだ。

患者の点滴ルートを入れ替える処置でミスをしたとき、奈津美は完全に気が動転していた。処置室で泣きそうになりながら謝る奈津美に、当時の先輩が言った。

「誰にでもあることだよ。大事なのは、このあとどうするかじゃない？」

あの言葉は、胸に染みた。

失敗した事実は変わらなくても、そのあとの行動で信頼は取り戻せる。

そんな希望を教えてくれた言葉だった。

——なのに、今の師長の言葉はどうだろう。

「ちゃんと見てたの？」

「確認すべきだったでしょう？」

過去を責める言葉ばかりで、「これから」を共に考えようという姿勢は、そこにはなかった。

あのときの先輩はもう退職している。

でも、今でもときどき思い出す。

奈津美の中に、その人の言葉はちゃんと残っている。

「未来を考える言葉を、私も誰かに渡せただろうか」

そう考えて、ハッとした。

最近は、後輩たちにどんなふうに接していただろう。

忙しさやストレスにからまけて、感情のままにきつく言ってしまったことはなかつたか。

職場が苦しく感じる原因是、上司との関係だけじゃなく、

自分自身が、自分らしく働けなくなってきたからかもしれない。

「もう少しだけ、頑張ってみたいな……この場所で」

でも、ただ我慢するのではない。
言いたいことを、きちんと伝えたい。
それが難しければ、せめて、自分のなかに「譲れないもの」を持ち続けたい。

夜、帰宅してから、机にノートを開いた。

《私は、自分の言葉で、自分の仕事を守りたい。》

そう書いたとき、不思議と涙がこぼれた。
悔しさでも、悲しさでもない。
ようやく、心の奥で絡まっていた感情が、ひとつの形になった気がしたからだ。

第6章 静かに決めたこと

数日後、奈津美はいつものように病院のロッカールームで白衣に袖を通していた。
鏡の中の自分と目が合う。
ほんの少し、顔つきが変わった気がした。

出勤する足取りはまだ軽いとは言えない。
でも、重さが全て自分のせいじゃないことを知っているだけで、少し違う。

今日の勤務は日勤だった。
申し送りの時間になると、例の師長——桐谷さんがナースステーションに現れる。
いつものことながら、空気が一瞬張り詰める。

患者の夜間の様子について報告する後輩が、言葉を選びながら説明していた。
その声を、桐谷さんは無表情に聞いている。
そして、報告が終わると、やや尖った口調で言った。

「それ、確認してた？　あなたの判断だけでいいと思ったの？」

一瞬、空気が止まった。
後輩の千夏が俯いたのが分かった。
そのとき、奈津美は、静かに一步踏み出していた。

「すみません、補足させてください。そのときの判断は私も確認しています。状況を見て、対

応は適切だったと思います」

一瞬、師長の目が動いた。
全体が静まりかえる。

だが、奈津美の声は揺れていなかつた。

桐谷さんは何も言わず、視線をスライドさせると、次の話題に移つた。
奈津美の胸は少し早鐘を打っていたが、不思議と後悔はなかつた。

申し送りが終わってから、千夏がそっと寄ってきた。

「ありがとう……助けられた」

「ううん。わたしも、黙ってたらずっと苦しいままだったと思うから」

ふたりは笑い合つた。
たった数秒のやりとりだったが、奈津美の中では確かに何かが変わつた。

午後、病室の窓際で、車いすの患者が新聞を読んでいた。
奈津美はその横に立ち、穏やかな声で話しかける。

「暑くなってきましたね。水分、しっかりとってくださいね」

患者は微笑みながらうなずいた。

こんな時間の積み重ねが、奈津美にとっては何より大切だった。

夜、自宅の机でまたノートを開く。
数日前に書いた言葉の下に、新しい一文を書き足した。

《この場所で、私なりの働き方を探してみたい。》

無理に続けるわけじゃない。
我慢だけで耐えるわけでもない。
辞めることも、選択肢のひとつ。
でも今は、まだここでやれることがある気がしていた。

耳をふさぎたくなるような言葉がある日も、
心ない態度に傷つく日も、
それでも、自分の声を見失わないように——。

キャリア相談の日から始まった、小さな変化。
それはきっと、これからも少しずつ続していく。

奈津美は静かにノートを閉じ、明日の支度を始めた。

— 終わり —

Stories on the way.

巻末付録

【キャリア理論解説】

本作に登場する主人公・森山奈津美の体験は、キャリアの転機・職務上の葛藤・心理的ストレス・意思決定に関する重要なプロセスを含んでおり、複数のキャリア理論によって理解・整理できます。以下に、適用可能な主要理論を紹介します。

1. シュロスバーグの転機理論(4S モデル)

背景:師長交代という“外的で予期せぬ”出来事により、奈津美は職場継続の可否に悩み、キャリア上の転機に直面している。

4S モデルによる分析:

Situation(状況)	師長交代・理不尽な叱責・夜勤インシデント・責任の押し付けなど
Self(自己)	真面目さ・責任感・感情の抑制傾向・職場愛着・内省力
Support(支援)	同僚との関係性・後輩からの信頼・キャリア相談という外部支援
Strategies(戦略)	キャリア相談を通じた内省・意思表明・対話による行動選択

⇒奈津美は、転機の意味づけを通じて自己理解を深め、「転職か否か」よりも「自分らしく働くにはどうすればいいか」という視点に移行している。

2. スーパーのキャリア発達理論(ライフ・スパン／ライフ・スペース)

背景:奈津美は38歳で「確立期」(25~44歳)後半から維持期(45~64歳)への橋渡しどなる時期に位置しており、看護師としての専門性を十分に培い、中堅としての役割や責任を日常的に果たしている時期にある。

確立期の特徴である「職務上の成長と評価」や「役割拡大」を経て、彼女は自らの「自己概念」と照らし合わせながら、組織との価値観のずれに葛藤している。

⇒今回の相談では、職場内の理不尽さにどう向き合うかを模索する中で、自分にとって「働き続ける意味」や「納得できる貢献の形」を問い合わせ直している姿が見られた。

3. 自己効力感(バンデューラ)

⇒対話と実際の行動(発言、後輩の擁護)によって、自己効力感が回復されていく過程がうかがえる。

4. ナラティブ・アプローチ(ストーリーの再構築)

背景:奈津美は相談を通して、自身の語らなかった過去の記憶(先輩の言葉、後輩との関

係)を物語として再解釈し、「私のせい?」という問い合わせから「私の声で守る」という前向きな物語へと転換している。

⇒ナラティブの観点からは、「意味づけの再編」がキャリアの選択肢を広げている。

【キャリコン視点からの振り返り】

1. 関係構築: 共感的理解と安全な場づくり

初対面のクライアントにとって「相談すること」自体が大きなハードルです。

西園は、落ち着いた口調で話しかけ、奈津美さんの沈黙も尊重し、自然な流れで語り始めもらえるよう心がけました。

2. 感情の明確化と意味づけ

奈津美さんは、自身の苦しさを「理不尽さ」や「責任転嫁された感覚」と表現しました。

そこに焦点を当て、「何が一番辛かったのか」「どこに誤解や葛藤があったのか」を整理し、感情を受け止めることで自己理解を促しました。

3. 選択肢を広げるための視点提供

「辞める」「我慢する」以外に、「自分の声を取り戻す」「働き方を工夫する」など、視点を増やす支援を意識しました。

転職が悪でも正解でもなく、いま感じている“働きづらさ”の構造を客観的に捉えるための材料提供を目的としました。

【逐語録】

相談者(CL): 森山 奈津美(38歳・看護師・15年目)

キャリアコンサルタント(CC): 西園 智久(62歳・男性)

CC: こんにちは。キャリアコンサルタントの西園と申します。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

CL: よろしくお願ひします。

CC: 本日は何かご相談があつて来ていただいたと思いますが、どのようなことでお悩みでしょうか?

CL: はい……看護師として 15 年ほど働いているんですが、最近になって色々なことを任されるようになって……ちょっと理不尽に感じることが増えてきていて……このまま今の職場を続けるのは難しいかも、って思うようになって……。

CC: そうでしたか。理不尽に感じられることが最近増えてきたのですね。もう少し詳しく教えていただけますか? どういった出来事がきっかけになっているのでしょうか。

CL: 2 年ほど前に師長が代わってからですね……それまではあまりそういう言い方をされることはなかったんですが、新しい師長になってから、自分の責任みたいに言われることが多くなって……この前、夜勤中にインシデントがあったんですけど、その後に“ちゃんと見てたの?”って責めるような言い方をされて……。

CC: そのように言われて、どんなお気持ちになりましたか?

CL: “なんで私にそんなこと言うの?”って思いました。私だけの責任じゃないし、その場に他のスタッフもいたのに……。

CC: その場にいたのは奈津美さんだけではなかったんですね。それなのに、名指しで責任を問われたような感覚があった。

CL: はい……なんだか、自分だけが責められてるみたいで。

CC: その師長の方は、他の職員の方にも同じような対応をされるんですか?

CL: はい……皆も“そういう人だから気にしないで”って言いくんですけど……気にしないふりをしてきたけど、ずっとそれが続いて、最近は限界かもって思ってます。

CC: なるほど。気にしないようにしてきたけれど、積み重ねでつらくなってきたのですね。

以前の師長さんはどんな方だったんでしょうか?

CL: ちゃんと話を聞いてくれる人でした。たとえミスがあっても、“次はこうしよう”って言ってくれて。今の師長は、ただ事実を突きつけて終わり、みたいな感じで……。

CC:今の上司の方とは、双方向の対話が難しい印象をお持ちなんですね。職場での立場としては、今どのくらいの位置にいらっしゃるんですか？

CL:中堅くらいです。上の人もまだ多いんですけど、後輩の指導も少しづつ任されてきていて……たぶん、求められているものも上がってると思います。

CC:そうすると、プレッシャーも大きくなっている中で、上司との関係がさらに負担になっているように感じますね。

ところで、奈津美さんご自身は、転職についてはどうお考えですか？

CL:今の職場は、環境も人間関係も基本的には好きなんです。できれば続けたいけど、居るのがつらくて……どっちにすればいいか分からなくて。

CC:なるほど……「続けたい」という気持ちと、「つらくて続けられないかも」という思い、その両方の中で揺れているのですね。

CL:はい。周りの人とも話したことはあるけど、結局は愚痴みたいになっちゃって……。建設的な話にはなりません。

CC:話す場があっても、気持ちを整理する方向にはならなかつたんですね。

職場での定期的な面談などはあるのでしょうか？

CL:年に2回くらいはあります。でも、あまり対話というより、形式的に“どうだった？”って聞かれる感じで……。先日の件でも、事実だけを問われて、“その後どうすればよかつたのか”みたいな話にはならなくて……。

CC:なるほど……“なぜそうなったか”ばかり問われて、今後どうすればいいかという視点や、協働的な改善の話には至らなかつた。

ご自身としては、未来を見据えた言葉が欲しかったということですね。

CL:そうですね……もし“次はこうしよう”って言わっていたら、たぶんこんなに落ち込んでなかつたと思います。

CC:そのお気持ち、とてもよく分かります。

今日こうしてお話しeidいたことも、一つの大きなステップだと思います。

もしよろしければ、今後どうしたいか、一緒に整理していくと良いですね。

※以降、相談継続の意思確認と予約調整へ(終了)

※上記は2025年5月24日に行われたロールプレイ逐語録の要約に基づき、再構成したものです。学習者が支援の流れやセリフ構成を理解しやすいよう配慮しています。

あとがき

誰かに「話す」ことは、単に言葉を口にする行為ではなく、自分の内側にある感情や思いを、改めて見つめ直す行為でもあります。そしてその行為は、ときに思っていた以上に、自分自身を救ってくれることがあります。

本作『耳をふさぐ夜に、言葉を探して』は、2025年5月に行われたキャリアコンサルティング実技ロールプレイ(CL:看護師役)を基に構成されたフィクション作品です。逐語録のやりとりを軸に据えながら、相談に至るまでの背景や、相談を経た後の変化を物語として丁寧に描き出すことを試みました。

主人公の森山奈津美は、転職か継続かという二者択一の中で揺れながらも、「自分らしく働きたい」という本質的な問いと向き合っていきます。

キャリア相談は、答えをすぐに与える場ではなく、「問い合わせ抱えたままでも進める」ことを確認し合う時間もあるのだと、あらためて感じさせられました。

キャリア支援に関わる方はもちろん、今まさに職場での違和感や葛藤を抱えている方にも、この物語が小さな気づきや勇気のきっかけとなれば幸いです。

本作は、ロールプレイ参加者の実感と学びに深く支えられながら執筆することができました。関係者の皆さんに心より感謝を申し上げます。

2025年8月 著者

小説『耳をふさぐ夜に、言葉を探して』(理不尽さのなかで立ち止まった看護師の物語)

© 2025 caritabito.com

All rights reserved. 無断転載・複製・引用を禁じます。

小説『耳をふさぐ夜に、言葉を探して』(理不尽さのなかで立ち止まった看護師の物語)は、著者の創作に基づくフィクションであり、登場する人物・団体・状況等はすべて架空のものです。